

『子供の時間』の受容と解釈

谷 林 真理子

I

ハーマン・シャムリン(Herman Shumlin)演出によるリリアン・ヘルマン(Lillian Hellman)の処女作『子供の時間』(*The Children's Hour*)は、レズビアンを扱った劇として1934年11月20日の初演以来、新聞・雑誌にセンセーショナルに取り上げられ様々な論議を呼んだ。若手女流劇作家の誕生を称える反面、否定的な批評も少なくなかったが、この劇は86週にわたり691回という上演記録を作った。30年代にブロードウェイで上演された劇のうち、これをしのぐものはわずか6作¹⁾といわれ、ヘルマン自身の劇の中でも最高記録を打ち立てた。

『子供の時間』はその後マッカーシー旋風が吹き荒れる1952年に再演、魔女狩りというテーマゆえに再び脚光を浴びた。すなわち観客は、嘘をでっちあげ二人の女性教師マーサとキャレンの一生を破滅させる恐るべき少女メアリーと、共産主義者をブラックリストに挙げ、彼らの一生を踏みにじったジョウゼフ・マッカーシー(Joseph McCarthy)を重ね合わせたのである。

この劇は二度映画化されその時々で論議的になったが、80年代に入ると、フェミニストシアターの見地から良くも悪くも再評価されるようになった。フェミニズムが社会に浸透し、人々の間にその思想が定着していくに従って、『子供の時間』はレズビアンをテーマとした劇としてようやく認められたというのである。しかし、レズビアンの肯定的な面を強調するレズビアンシアターの視点から見ると、この劇は「アメリカ演劇の中でレズビアニズムを扱った劇として50年以上もその地位を保ってきたものの、女性同士の愛情を、口に出すのも憚られ、見ても考えてもいけないもの」²⁾として描いている、と批判の声が上がる。そして同性愛を嫌悪する立場から、レズビアニズムを「つらく挫折感のある体験」³⁾と表したヘルマンはフェミニストとすらいえないという。

1984年のヘルマンの死後、彼女の伝記や彼女の身近な人々の手による手記が次々と発表され、劇作家リリアン・ヘルマンの実像がほぼ明らかにされてきたが、本稿は彼女の原点である『子供の時間』に戻り、この作品の受容の歴史をたどることにより、特に評価の分かれる第三幕の解釈について考えてみようというものである。

II

1933年リリアン・ヘルマンは、当時一緒に暮らしていたダシール・ハメット (Dashiell Hammett) から、スコットランドで実際に起きた裁判「閉ざされたドアードラムズビュー事件」(“Closed Doors; or The Great Drumsheugh Case”)のドラマ化を勧められた。これはウィリアム・ラフヘッド (William Routhead) 著の犯罪記録『悪友たち』(*Bad Companions*, 1931)に収められている事件で、1810年エディンバラの女子寄宿学校の経営者でもある二人の女性教師が、16才の生徒から同性愛の嫌疑をかけられ閉校を余儀なくされたというものである。二人は長期にわたって法廷で争ったが、社会的にも経済的にも破滅寸前まで追いやられたという。

ヘルマンはあらずじだけでなくいくつかの点—教師の叔母が元女優だったこと、メイドが存在しない鍵穴から二人が抱き合っているのを見たこと、部屋の位置など—をこの話から借用しているが、女性教師たちの破滅をより効果的に表すべく、登場人物の性格付けを明確にしたほか様々の脚色をした。「ドラムズビューズ事件」で噂を広める少女は、ある上流階級の老婦人の死んだ息子が残した私生児で、明らかに肌の色が黒いために寄宿舎では差別的な扱いを受けていた。ヘルマンは1934年という時代に合わせてインド人と白人の混血から白人の少女に変え、劇の冒頭から、そのひねくれた性格ゆえに二人の女性教師に嫌われていることをほのめかし、嘘の動機を与えた。また少女はT. ゴーティエ著『モーパン嬢』(*Mademoiselle de Maupin*, 1835)の愛読者で、男女だけでなく女性同士の愛情の知識もあると設定した。また教師の一人に婚約者がおり、叔母の話が生徒たちに立ち聞きされることもヘルマンの創作である。さらに大きな創作は、劇の後半で起きる教師の自殺とそれに続く祖母の謝罪である。実際には祖母は態度を変えず、二人の教師は11年後にようやく有罪判決を覆すことができたという。

III

初演の劇評では、シャムリンの思惑どおりキャレンとマーサを破滅に追いやる少女メアリーの存在に関心が集まった。ブルックス・アトキンソン (Brooks Atkinson) は1934年11月21日の『ニューヨーク・タイムズ』紙で、メアリーを「魔性の少女」(daiabolical adolescent), 「邪悪な性格」(evil character), 「意地悪な娘」(vicious maid), 「小悪魔」(miniature genius of wickedness)と形容し、実際の年齢はメアリーよりも10才ほど年上の女優フローレンス・マッギー (Florence Mcgee) の演技を絶賛した。しかしアトキンソンは大方の劇評家の意見を代弁

『子供の時間』の受容と解釈

するように、第三幕の最後の15分間の処理に疑問を投げかけた。ヘルマンはそこで結論を見付けようと必死になっているが、ピストル自殺の前、すなわち辻褄合わせの前でこの劇を終わらせるべきだった、「二人の人間が掻き立てられた世論の悪意に打ち負かされるとき、彼らに憎しみと諦めという威厳を残しておいてやりたい」と彼は言う。彼は二週間後の同紙でも、幕切れの扱いについて「経験に基づくお定まりの罪の告白と自殺」と批判、ティルフォード夫人がよく調べもせずスキャンダルを広めたこと、大人が子供の噂話を信じたこと、メアリーとロザリーと一緒に尋問されたことなど、結末に至るまでの不自然な流れに疑問が残ると評した。

ジョーゼフ・クルーチ (Joseph W. Krutch) も『ネイション』誌12月5日号で、アトキンソン同様にメアリーを「小悪党」(juvenile villan)、「悪魔」(demon)、「嘘つき」(liar)、「詐欺師」(cheat)、「暴君」(tyrant)と呼び、第二幕目までは「最も意地悪で憎らしい少女についての、きわめてよく書けた劇」との称賛を惜しまないが、第三幕に入ると「あまりに無理があり、あまりに現実離れした展開で、あまりに退屈で」、メアリーが作り出した効果は完全に崩れ去り、観客はきわめて的外れな結末に啞然とさせられる、と落胆の意を示している。彼は第三幕のメアリーの不在と、二人の教師中心の筆舌しがたい退屈さを指摘し、第三幕はこの劇の本当の結末でないことをリハーサル中になぜだれも気付かなかったのか、と言う。

そしてジョージ・ネイサン (George Nathan) も『ヴァニティー・フェア』誌1935年2月号で、依然ロングランを続けていた『子供の時間』に賛辞を送りながらも、第三幕の後半の展開を疑問視した一人である。彼は、この事件に巻き込まれた大人たちの一人も常識を示さず、孫娘の嘘を知った祖母が許しを乞いに再登場したという二点によって、この部分を入れたことは失敗だったと考える。

このように初演では結末の扱いに議論が集中し、ほぼ一年半にわたって新聞・雑誌を賑わしたが、同性愛というテーマゆえにピューリッツァ賞を逃した。さらにボストン、シカゴで上演禁止の憂き目に合い、ロンドンでは非公式ながらようやく上演許可が下りたのは1936年のことだった。

IV

『子供の時間』は1952年12月シャムリンに代わってヘルマン自身の演出で再演されることになった。彼女がその年の5月に非米活動調査委員会から召喚されたことも手伝って、この再演は当然のことながらマッカーシイズムとの関連でとらえられた。ヘルマンはリハーサルの前にキャストをニューヨークの自宅に招き、初演の劇評を見せながら演出の意図を彼らに話した。

彼女は多くの劇評家を悩ませた第三幕を書き直そうとして脚本を念入りに読み直した結果、誤っていたのは自分ではなく、メアリーと彼女が現す悪に重点を置き過ぎたシャムリンの演出だと気付き、今度は自分で演出することにしたという。「もしこの公演でやろうとしていることが完璧に出来れば、批評家たちは前とは違った解釈をするはずだ。第一幕の進行は遅いが第二幕で良くなり、第三幕で完全な劇になったと言うだろう」とヘルマンはキャレン役のキム・ハンター (Kim Hunter) に語ったという。事実ヘルマンもマーサの自殺で終わるべきだと一度は思ったが、よくよく考えた末、最後の15分は劇に組み込まれていて除くことができないことに気付いた、と後のインタビューで語っている。

まさにヘルマンの期待どおりの評を載せたのは、1952年12月29日の『タイム』誌だった。「より厳しく、より人間味ある何か、同時にこの話に広がり始めるのは最後の幕である。まさに最後の場面で一生き残ったほうの教師が、事実を知って後悔の念に打たれた老女と対面したとき—この劇は感情的にも道徳的にも悲劇性を帯びる」

『ニューヨーク・タイムズ』紙のブルックス・アトキンソンも12月19日と28日の劇評欄で、1934年の価値基準で書かれた『子供の時間』が現在の政治的含みを持つと称賛し、演出家としてのヘルマンを好意的に迎えている。彼は初演時の批評とは異なり、第三幕の告発された二教師の怒りと恐怖、自殺のショック、祖母の後悔と空しさは第一幕から論理的に組み込まれたもの、と結末の場면을正当化した。

さらにクルーチも初演を振り返り、嘘の残酷さに根拠がないにもかかわらず上演回数は約700回に及び、十分素晴らしい劇であることが証明されたと評した。

ヘルマンは演出に際し初演台本にはほとんど手を加えなかった、とインタビューで述べているが、中心をメアリーからキャレンとマーサに移したことにより、17年前とは正反対の批評が寄せられたのである。

しかし、『サタデー・レビュー』誌(1953年1月10日)のヘンリー・ヒューズ (Henry Hewes) のように初演時と同じような批評をした劇評家もいた。彼は『マッカーシイズムの時間』という題の方がふさわしいと前置きしたうえで、第三幕のメアリーの不在と詩的緊張感の欠如を指摘した。そして19世紀初頭の実話を20世紀に置き換えること自体に無理があり、第三幕の失敗はヘルマンの脚本・演出両方に問題があると演出家ヘルマンを批判した。

同じく否定的な批評を『ニュー・リパブリック』誌1月5日号に載せたエリック・ベントリー (Eric Bentley) の意見は、ヒューズとは少し異なる。『子供の時間』には二つの話が暗示されている、と彼は指摘する。「一番目は異性を愛する教師たちがレズビアンズムのかどで告発されるという話で、敵は無実の人を罰する社会である。二番目はレスビアン教師がレズビ

『子供の時間』の受容と解釈

アンの疑いで罰せられるという話で、敵はレズビアンを罰する社会である。……彼女は一番目の話で劇のほとんどを使い、幕切れの数分間でわれわれは教師の一人が本当にレズビアンであることを知る。そのときには二番目の話をし、その倫理について語るには遅すぎる」と。すなわち彼によれば、無実の教師が社会と戦うところから出発したにもかかわらず、第三幕でレズビアンだと知らされるに至って、だまされたと感じざるをえないというのだ。また彼は『子供の時間』と共産主義との関連を否定、ヒューズ同様演出家ヘルマンにも不満を表し、演出上の最大の欠点は、彼女が脚本に手を入れる代わりにその欠陥を分かち合ったことだと批判した。個々の登場人物のみならず公演全体に真の情熱が欠け、「憤りは本物の情熱なのだから、その点で『子供の時間』は失敗作」と手厳しい。

こうして、再演では批評の偏りはなくなり、ヘルマンの意図どおりキャレンとマーサの悲劇に焦点があてられたが、今度は第三幕の演出上の欠陥を指摘する評が現れたのである。

V

『子供の時間』の映画化は過去二回行われた。一回目はヘルマンの脚本、ウィリアム・ワイラー(William Wyler)監督の下で1936年に『この三人』(*These Three*)という題で映画化された。このときは話の大筋は劇と同じだが、製作基準(Production Code)に従って、登場人物の関係をレズビアンではなくマーサ・キャレン・カーディンの三角関係に作り替え、マーサはキャレンではなく彼女の婚約者カーディンを愛する。そのためメアリーが告発するのは同性愛ではなく異性愛であった。

『この三人』の冒頭のシーンは大学の卒業式、キャレンはマーサと将来について話し合い、二人で女子校を開く決心をする。さらにカーディンとの出会い、最初の生徒メアリーのことなど、劇では曖昧だった事実がこの映画では明らかにされている。『この三人』の製作関係者は原作の内容を充分承知していたが、ここでは直接レズビアニズムを連想させるものは全くみられない。だが、キャレンとカーディンの明るくロマンティックなテーマ曲とは対照的な訴えかけるようなマーサのテーマ曲に、マーサのキャレンに対する愛情をそれとなく示そうとした。結末は、マーサがティルフォード夫人に頼んで、ウィーンにいるカーディンとキャレンを会わせる手筈を整え、ウィーンのコーヒーショップで二人が抱き合うシーンで終わる。

二度目の映画化は1962年、脚本ジョン・ヘイズ(John Michael Hayes)、監督ウィリアム・ワイラーによって行われた。1961年に製作基準の改正があり、同性愛はその他の性的倒錯と同様映画の題材として許可されたため、今回はレズビアンの話に戻され、題名も劇と同じ『子供

の時間』(*The Children's Hour*) (邦題：『噂の二人』)になった。

脚本執筆は再度ヘルマンに依頼されたが、61年にハメットを亡くした彼女は映画化への意欲を失っていたため、ヘイズが書くことになったという。ここでワイラーはマーサ役にシャーリー・マックレーン、キャレン役にオードリー・ヘップバーン起用し、最初からマーサに男性的役割を与えている。ヘイズはメアリーの役割を弱めたほか、第三幕の扱いについて二つの変更をした。それは、より刺激的に視覚に訴えるために、マーサの自殺を首吊りに変えたこと、そしてマーサのキャレンに対する愛の告白と自殺の間にティルフォード夫人が登場することである。後者は構成上の大幅な変更で、夫人が謝罪のため訪れたときマーサはその場に同席しているが、心の中の無意識の愛情を認めた彼女は死を選ぶ。結末はマーサの墓のかたわらで弔辞を述べたキャレンが、カーディンとティルフォード夫人の存在も目に入らぬ様子でその場を去るというもので、キャレンのむしろ男性的な表情の中に、彼女もまたレズビアンではなかったかと思わせるような終わり方だった。

この『子供の時間』は商業的にも失敗作だったが、またしても同性愛が強調され、結果的にヘルマンの意図とは程遠いものになった。

VI

ヘルマンはインタビューなどで再三にわたって『子供の時間』は「レズビアニズムの劇ではなく、嘘についての劇」だということを強調している。レズビアニズムは初演時には確かに世間に受け入れられない題材だったが、あくまでこの劇の副次的問題なので、観客は誰もレズビアン劇だとは思わないだろうと、彼女は断言する。だが、フェミニスト理論の視点からアメリカ演劇を概観するとき、『子供の時間』は必ずと言っていいほどレズビアンを扱った劇と受け取られる。

『フェミニスト・シアター』(*Feminist Theatre*, 1984)の著者ヘレン・ケイサー(Helene Keyssar)によれば、『子供の時間』は女性演劇の否定的モデルとして、女性による女性についての演劇とフェミニストドラマの違いを示すのに役立つという。さらに、レズビアニズムがまだ公然と口にできない時代に、ヘルマンが舞台にそれを持ち出したことは「演劇界における画期的事件」と述べる。だが、彼女は第三幕の最後の展開については次のように解釈する。マーサがキャレンに対する無意識の愛情を告白したときのキャレンの最初の反応は、マーサを“crazy”, “ill”と決め付けたことであった。この言葉からレズビアニズムに対する社会の拒絶がはっきりと読み取れる、とケイサーは考える。マーサはこのようにキャレンを含めた誰から

『子供の時間』の受容と解釈

も拒絶され、自己嫌悪に陥った結果自殺するのである。「だがこの劇はあっと言う間に舞台の外の暴力を押え込み、一人の『慎み深い』ノーマルな女性が、耐えることも傷付くこともないということを再確認して幕が下りる。この劇のラストシーンは、ほほ笑みながら日の光を浴びて『とてもいい気持』というキャレンの姿である。」 言い換えるとケイサーは、同性愛にアブノーマルというレッテルを貼り、その結果としての不幸な自殺を観客に見せた後、その問題と取り組むのではなくあっさり舞台の外に追いやり、残されたノーマルな女性の明るい未来を示すというヘルマンの安易な展開を批判する。『子供の時間』はヘルマンの後期の作品同様にステレオタイプの女性像を確認させるだけで、女性に対する少しの愛情や尊敬も示しておらず、マーサの性格と運命は「幸せなレズビアンになることは不可能」だと暗示させる、とケイサーは書いている。

VII

『子供の時間』を論ずるときレズビアニズムは確かに切り離せない要素だが、ヘルマンが言うように、この劇のテーマは明らかに別のところにあるようだ。ヘルマンはそれを最大限に効果的に示すべく、第一幕から綿密な計算の下に劇の構成をしたのではないだろうか。これまでたどってきた劇評の主な批判は第三幕の展開に集中しているが、ヘルマンが最も言いたかったことは問題の最後の15分にあると思われる。ここで第三幕を最初から追うことにより、この劇のテーマを考えてみたい。

幕が上がるとそこは第一幕と同じ学校の居間だが、雰囲気は一変して重苦しい。生徒たちの去った学校にはキャレンとマーサの二人だけが取り残されている。彼女達にはレズビアン嫌疑がかけられ、人も訪れず外出もままならぬ有り様である。そこにモアター夫人が登場する。噂の出所は彼女であるにもかかわらず、法廷での証言を拒み姿をくらませていたのである。二人を心配したカーディンが登場するが、キャレンがキスをしようとしたとき、彼は「ほとんど目に見えないくらいだか」⁴⁾身を引く。三人でウィーンに行こうと言うカーディンだが、彼は「しちまったこと」「起こったこと」は水に流せばいいと言う。キャレンは法廷でカーディンの顔が「恥じていた」と非難、彼が去った後「いいえ、帰って来ないわ。永遠に」とつぶやく。つまりカーディンは「あたしたちが恋人同志だと思っていた」とキャレンは語る。ここに至って、マーサはいままでは意識下に抑えられていたキャレンへの愛情を告白する。「わたし、あなたを、みんなが言っていたみたいに愛してたんだわ。…だけど、こういうことが起きるまでわからなかった」と。(ヘルマンは注に、マーサのこの気持を「無意識のレズビアン」(an un-

conscious lesbian)と記している。後にヘルマンは、マーサはメアリーの告発がなければ同性愛の傾向があることに気付かず、自殺することもなかっただろうと語っている。) ⁵⁾これに対しキャレンは「あなた、疲れてどうかしているのよ」「横になってきなさいよ、マーサ。そしたら気分がよくなるわ」と促す。

自分の心の中を直視したマーサには「明日なんてもものはありはしない」。彼女は「明日のない世界で話す言葉を」「でっちあげ」なければならぬのである。しばらくして隣室で銃声が聞こえ、マーサの死が知らされるが、取り乱すモアター夫人にキャレンはきわめて冷静に振る舞う。やがてティルフォード夫人が登場、メアリーの言ったことが「本当ではなかった」ことがわかったと言う。夫人は孫娘の悪行の一部始終を話しキャレンに謝罪を求めるが、婚約者と親友を一度に失った彼女には夫人の正当化を認める余裕はない。カーディンのもとへ戻るべきだと言うティルフォード夫人に、キャレンはほほ笑みながら「ええ、もしかして」と言う。キャレンは無意識に窓に歩み寄り、今まで閉ざしていた窓を少し開けると「とてもいい気持ち」と言いながら夫人と顔を見合わせて微笑する。夫人はキャレンの背中に向かって別れを言い退場するが、キャレンは彼女が去った1分後、振り向かず片手を挙げて「さようなら」と言って幕となる。

ビグズビー (C.W.E. Bigsby) は初期の批評家のように、ティルフォード夫人が再登場することのタイミングの良さと、隣室にマーサの遺体があるのにキャレンが少しも取り乱さないのは不自然だと指摘するが、マーサの自殺の前と後のキャレンの変化をたどると、次第にヘルマンの巧みな構成が明らかになってくる。すなわちマーサがキャレンに対する愛情を告白してから自殺に至るまでの、キャレンの心の動きと動作の変化をト書きで追うと次のようになる。彼女は最初は「ショックを受け」(horrified) (71) ⁶⁾、「両手で耳をふさぎ」(put her hands over her ears) (71)、次には「慎重に」(deliberately) (71)、「身を固くして」(tensely) (71)、「用心深く」(carefully) (72)、そしてついに「震えた、たよりなげな声で」(in a shaken, uncertain tone) (72)、「泣きながら」(crying) (72) マーサに話しかける。

キャレンは婚約者の心の中に疑惑と裏切りを見付け、親友の心の中に見てはいけぬものを見てしまったのだ。マーサが「明日なんてもものはありはしない」と言ったとき、キャレンはこれから起きることがすべて見えたのではないだろうか。マーサが死を選んだ後、キャレンに残されたものは憎しみを越えた諦めであった。これもやはりト書きに明らかである。彼女は「抑揚のない声で」(in a toneless voice) (73)、「振り向かず」(without turning) (73)、「疲れたように」(wearily) (73)、そして「機械的に」(mechanically) (74) 話す。真実を知ったティルフォード夫人がいかに謝罪しようと、キャレンには空しく聞こえるだけである。しかしそこに

『子供の時間』の受容と解釈

は人間の心の醜い部分を見てしまった一人の女性の、一度は絶望の淵に突き落とされたものの、これからは誰も頼らず一人で生きようとする強さが感じられる。あくまで尊厳を失うことなく夫人には背を向けままだが、ここに来てキャレンには夫人を許すことのできる寛容さすら芽生える。外の空気を少しだけ吸い、決して後ろを振り向かず片手を上げたその仕草の中に、キャレンの姿勢、女性として人間としての本当の自立が感じられる。

VIII

初演時には第三幕におけるメアリーの不在を指摘する評が多かったが、このようにヘルマンがこの劇で描こうとしたのはキャレンという一女性の自立だったと考えれば納得がいく。メアリーは第一幕で、キャレンに叱られた腹いせに同級生を手なずけ彼女に仕返しをたくらみ、第二幕では嘘をでっちあげ、祖母のティルフォード夫人を信じこませてキャレンを窮地に追い込む。このようにメアリーはキャレンとマーサの一生を踏みにじる張本人だが、この劇の中心は彼女の行動によって破滅させられる二教師にある。『子供の時間』が再演されていた1953年に、ニューヨークで初演を迎えたアーサー・ミラー (Arthur Miller) 作『るつぼ』 (*The Crucible*) の成功には、魔女狩りという時代背景が反映しているが、この劇は構成上でも『子供の時間』と類似点が多い。『るつぼ』では、少女アビゲイル・ウィリアムズは主人ジョン・プロクターに冷たくされた仕返しに、仲間の少女たちを巻き込んで集団ヒステリーを起こし、次々に善良な人々を魔女に仕立てあげ、ついには主人夫婦の一生を破滅に追い込む。『子供の時間』のメアリーと同様に、アビゲイルも最終幕になると登場しない。二人とも嘘を大人たちに信じこませて騒動を引き起こす人物だが、単に動機を与えるに過ぎず、彼女たちの行動がきっかけとなって主人公たちの一生に変化が起きるのである。『るつぼ』のプロクターは、告白書を破り捨てることにより自分の名前を守り通し、絞首刑に処せられる。そして『子供の時間』では、同性愛を告白したマーサは死を選び、彼女と築いた学校に一人残されたキャレンはそこから出て行く決心をする。この旅立ちはケイサーの指摘するような明るい未来であるはずがない。キャレンは一生苦悩を背負って、なおも生き続けなければならないのである。

こうして初演以来様々な論議を読んだ幕切れの約15分間は、第一幕からの緻密に計算された背景があってこそ生きてくることがわかる。かつてヘルマンは「女流劇作家」とか「女流作家」と呼ばれるときどんな感じがするかと尋ねられたとき、ただ一言「いらいらします」と答えている。彼女の頭の中には、女性による、女性のための、女性にかんする演劇などという概念は毛頭なかったのだろう。80年代のフェミニスト・レズビアンシアターの主唱者たちは、へ

ルマンの描くマーサとキャレンの関係を否定的だとして批判したが、彼女がこの作品で目指していたものは性を超えた一個の人間としての自立であり、それこそ一人の劇作家の誕生としてふさわしいものであった。

注

1. Goldstein, *Political Stage*, 149
 2. Hart, "Canonizing Lesbian?", 278.
 3. Case, *Feminism and Theatre*, 76.
 4. 訳は小池美佐子訳, 『子供の時間』(東京:新水社, 1980年)を使わせていただいた。
 5. Wright, *Lillian Hellman: The Image, the Woman*, 78.
 6. Hellman, "The Children's Hour," *Six Plays by Lillian Hellman* (New York: Vintage Books, 1979).
- 以下、この作品からの引用はページ数のみを示す。

参考文献

- Atkinson, Brooks. *The New York Times Theater Reviews 1920-1970*, vol. 3. New York: The New York Times & Arno Press, 1971.
- . *The New York Times Theater Reviews 1920-1970*, vol.4. New York: The New York Times & Arno Press, 1971.
- Bentley, Eric. "Lillian Hellman's Indignation." *The Dramatic Event*. Boston: Beacon Press, 1954.
- Bigsby, C.W.E. ed. "Lillian Hellman." *A Critical Introduction to Twentieth-Century American Drama*, vol.3. Cambridge: Cambridge University Press, 1985.
- Bryer, Jackson R. ed. *Conversations with Lillian Hellman*. Jackson: University Press of Mississippi, 1986.
- Case, Sue-Ellen. *Feminism and Theatre*. London: Macmillan, 1988.
- Dick, Bernard F. *Hellman in Hollywood*. London & Toronto: Fairleigh Dickinson University Press, 1982.
- Falk, Doris V. *Lillian Hellman*. New York: Frederick Ungar Publishing Co., 1978.
- Goldstein, Malcolm. *The Political Stage*. New York: Oxford University Press, 1974.
- Hart, Lynda. "Canonizing Lesbians?" *Modern American Drama: The Female Canon*. Ed. by June Schlueter. London: Associated University Presses, 1990.
- Hellman, Lillian. *Six Plays by Lillian Hellman*. New York: Vintage Books, 1979.
- Hewes, Henry. "Between the Dark & the Dark, Dark Darkness." *The Saturday Review*. New York: The Saturday Review Associates, Inc. January 10, 1953.
- Keyssar, Helene. *Feminist Theatre*. London: Macmillan Educational Ltd., 1984.
- Krutch, Joseph Wood. "The Heart of a Child." *The Nation*, vol. 139, no. 3622, December 5, 1934.
- . *The American Drama Since 1918*. New York: George Braziller Inc., 1957.
- Matthews, T.S. ed. "Old Play in Manhattan." *Time*. New York: Time Co. Ltd., December 29, 1952.
- Miller, Arthur. "The Crucible." *Arthur Miller's Collected Plays*. New York: The Viking Press, 1957.

『子供の時間』の受容と解釈

Nathan, George Jean. "The Theatre." *Vanity Fair*, Greenwich: The Conde Nast Publishing Inc., February 1935.

Rollyson, Carl. *Lillian Hellman: Her Legend and Her Legacy*. New York: St. Martin's Press, 1988.

Wiles, Timothy J. "Lillian Hellman's American Political Theater: The Thirties and Beyond." *Critical Essays on Lillian Hellman*. Ed. by Mark W. Estrin. Boston: G.K.Hall & Co., 1989.

Wright, William. *Lillian Hellman: The Image, the Woman*. New York: Simon and Schuster, 1986.